

糖尿病専門クリニックの立ちあげたい先生方へのアドバイス

医) 弘正会 ふくだ内科クリニック

理事長 福田正博

糖尿病専門クリニックの立ちあげを考えているドクターはおそらく糖尿病専門医であり、すでに病院において糖尿病外来を経験されているものと思いますが、循環器内科や消化器内科と違い病院における業務とクリニックで実施できる業務には両者に大きな差はありません。なぜならば糖尿病診療の中心は患者の生活指導にあるからです。その観点から糖尿病専門クリニックを開設する際のアドバイスを書いてみました。

開業成功のキーワードはコメディカルスタッフの育成です。なかでもは糖尿病診療に不可欠なのは食事指導であり、これを担当する管理栄養士の役割は重要です。しかしクリニックでは採算が取れないと言うことで雇用を敬遠されがちです。確かに、1日あたりの栄養指導の件数が少ないと現状の保険点数（初回 260 点 2 回目 200 点 初診時は月 2 回、以後は 1 回のみ算定可）を考えた場合、栄養士雇用の人件費はカバーできず赤字となり、栄養士の雇用に踏み切れないようです。しかし糖尿病診療を中心に据えようと考えた場合には栄養士は不可欠です。診療の質を上げることでトータルとしては十分ペイできると考えてください。当院では栄養士を非常勤 2 人、常勤 1 人雇用していますが、栄養指導も点数を算定する件数は 1 日 2 ～ 3 件程度にすぎません。当院では管理栄養士は栄養指導室にいて指導するのではなく、クリニック内を遊軍として待合室、検査室、診察室を移動しつつ、機会をとらえてワンポイント食事指導を実施しています。もちろんこの指導では保険点数は算定できませんが、このような的確な簡単なアドバイスの積み重ねが糖尿病の血糖管理の質を上げていき、ひいてはクリニックの評価も上がっていきます。管理栄養士は卒業生の数に比し就職先が限られており良い人材が多く埋もれているようであり、求人をしても多く応募はあります。

最近、看護師はなかなかの求人難です。そこで考慮されるのが臨床検査技師の雇用です。臨床検査技師も採血ができるので、採血業務を任せられます。また HbA1c 測定用の HPLC 機の較正、カラム交換などのメンテナンスなども任すことができます。さらに頸動脈エコーなどの超音波検査をできる方も多く、看護師を複数雇用するより、臨床検査技師と組合せるのも良い選択枝であるとも思います。

なお、コメディカルスタッフには職種にかかわらず糖尿病の患者教育に携わってもらうことが大切であり、それぞれに糖尿病療養指導士の資格を有する方が望まれます。入職時に資格を有していない場合でも面接時に患者会の活動などにも興味あるかどうかを聞き取りしておくのがよいでしょう。そして勤務をしながら CDE の資格を取ってもらうようにしましょう。CDE-J の取得は大変ですが、各地方にはローカル CDE 制度がありますので、まず

はローカル CDE の取得をとり、ステップアップしていただければよいでしょう。CDE を取得し積極的に患者教育にコミットすることで仕事へのやりがい度も高まり職場への定着率も高まります。

また、通院している糖尿病患者さんの患者会を組織することも大切です。その際は日本糖尿病協会に加入することをお勧めします。患者会の活動として、コメディカルスタッフの力をかりて食事会や歩こう会を開催したり、また各地区糖尿病協会が実施するウィークラリーへの参加などにおいてコメディカルスタッフとの交流を通じて信頼関係が醸成されます。ただしこのような行事への参加は強制ではなくボランティアとして参加してもらいましょう。そして当日の日当などは給与とは別にお渡しするという風に当院ではしております。

開業時にそろえたい機器

内科一般の機器に追加して必須なのは HPLC 法による HbA1c 測定機器です。現在日本ではトーソーとアークレイの 2 社があります。最近では簡易の HbA1c 測定機器がでていますが、ランニングコストが高く、測定時間もややかかりますし、第一に精度も不十分です。糖尿病専門クリニックをめざすなら HPLC 機は必須です。初期投資額は決して安い物ではありませんが、コスト的にも月間 200 検体以上なら外注より安くなりますし、なんといってもその場で 1～2 分で結果を得ることができるのが大きな魅力です。次に常備したいのは体脂肪量や骨格筋指数 (SMI) が測定できる Inbody や TANITA の業務用の体組成計です。保険点数を算定できるわけではないのですが、メタボリックシンドロームやサルコペニアの診療にも有効活用しています。

合併症検査として、IMT やプラークの有無を精査する頸動脈超音波検査機器、PWV または CAVI など脈波検査機器もあれば便利ですが必須というわけではありません。循環器内科と密な連携をとりお願いするということ良いと思います。

また無散瞳眼底カメラもあれば便利、もちろん眼科への受診勧奨が基本ですが、初診時にスクリーニング目的当院では実施し眼科へ紹介しております。最近ではオートで撮影でき画像をそのまま電子カルテに LAN 経由で転送できるので便利です。

電子カルテも最近では様々な企業が参入し選択枝が増えましたが、当院では選択の基準として以下のポイントを重要視しています。

①体重、HbA1c や eGFR の時間的推移がワンタッチでグラフ化され表示できる。患者指導にも有用です。治療方針の決定や専門医への紹介の際にも経過を視覚化できるのは便利です。

②PHR (personal health record) との連携が可能か。最近、患者さん自身のスマホに PHR のアプリをインストールし、食事や歩数などの LIFE LOG を記録、さらに体重や家庭内血圧測定、DATA、SMBG の DATA、そしてリブレなどの CGM の DATA を入力される方が増えつつあります。今後患者さん自身が有する PHR は医療連携 DX 化の HUB になると思われます。またまた外注した血液検査 DATA も電子カルテに戻ってきたタイミングで患者

PHR と共有できることも可能になってきましたので、 PHR との連携機能ができるということもポイントです。

以上、当院での経験をもとに糖尿病専門クリニックを開業するにあたってのアドバイスを記載しました。 ご参考になれば幸いです。